

2007年度 沖縄キリスト教学院公開講座 特別講座 ベッテルハイムの琉球伝道の史的意義

照屋善彦

2007年7月25日(月) 19:00~20:30

沖縄キリスト教学院 チャペル

(司会)

キリスト教学院公開講座の一環であります、特別講座にお集まりくださいましてありがとうございます。私は本日の司会を務めます沖縄キリスト教学院大学、英語コミュニケーション学科の山里恵子と申します。よろしく願いいたします。

それではまず、本日の講座のプログラムをお知らせいたします。最初に、本学の学長、神山繁實が講師紹介をいたします。その後、講師の照屋善彦先生に時間をたっぷりお使いくださいまして、ベッテルハイムの琉球伝道の史的意義についてお話していただきます。その後、短時間ではありますが、質疑応答の時間を設けております。プログラム自体は20時30分に終了予定しております。

さて、本学はこれまでに多くの講演や講座を開催してきましたが、今日のこの講座は本学始まって以来の新しい講座です。講師の先生は、皆様よくご存知の照屋善彦先生です。先生は、宣教師ベッテルハイム研究の第一人者です。その先生をこの度、本学初めての客員教授としてお迎えすることができました。ですからこの講座は、本学初の客員教授による講演、講座ということになります。先生を客員教授としてお招き致しました経緯を、学長の神山繁實にお願いいたします。それでは先生、早速ご紹介お願いいたします。

(神山)

皆さん、こんばんは。週半ばのお疲れの時期に、しかも大変暑い中、お越しくございましたことを心から感謝申し上げます。先程、山里恵子教授から説明がありましたように、本日、照屋善彦先生をお迎えして特別講演会を開くことになりました。本日の講演者照屋善彦先生は、琉球大学名誉教授で本学の客員教授第1

号になられた記念すべき先生であります。照屋先生は、1969年、米国コロラド大学から「ベッテルハイムと沖縄」という学位論文で博士号を取得されました。先生は多くの著書を出しておられ、国際的にも広く知られた研究者であります。先生のお働きについては新聞等を通してよくご存知のことと思いますので、それ程、ご紹介の必要はないかも知れませんが、琉球新報社第24回東恩納寛惇賞を授与されました。先生のお働きについては国際的にも広く知られ、特に、ベッテルハイム研究は沖縄にとって大変意味のあることであります。

先生が本学客員教授第1号になられた経緯をお話したいと思います。去る6月14、15、16日の3日間、コンベンションセンターで太平洋学術会議が開催されました。今年の学術会議には、幾つかの学術会議も加わりましたが、注目されることは、これらの学術会議が、これまで殆んど自然科学系の分野での研究会議でしたが、今回から人文科学系も入れることになり、本学も5人編成チームで「沖縄人のアイデンティティの由来」というトピックを取り上げることになりました。先生が本学のメンバーとして参加していただくために、客員教授規程を整備して先生を招聘し、客員教授としてその重責を担っていただくことになりました。これにより、本学はキリスト教大学として面目を施しましたことは言うまでもありません。

本日、照屋先生には、「ベッテルハイムの琉球伝道の史的意義」という題でご講演を賜ります。先生のご紹介については、充分ではありませんが、ご講演の中で先生ご自身のキリスト教とのご関係についても触れただけですので、これだけにしておきます。ご来会された皆さんに心から御礼申し上げ、私のご挨拶と致します。

では、先生、ご講演をよろしく願います。

(司会)

皆様どうぞ拍手でもってお迎えください。

(照屋)

皆さん、今晚は。はからずも今日、私は本大学の客員教授第一号の称号を授与されました。私は大変嬉しく光栄に存じます。照屋善彦と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

私とキリスト教

私は、演題からお察しできますように歴史家であります。多分、ここにいらっしゃる皆様は、キリスト教に大変関心をもたれ、或いは身を捧げておられる方々です。私の話すベッテルハイムについて、キリスト教の専門研究の方や身を捧げておられる方にとっては疑問の点も或いはあるかと思えます。けれども研究者としての私は、家族と一緒に那覇に滞在し、私どもの祖先と共に沖縄の空気を吸った一人の人間ベッテルハイムの生き様などを、今日は少しでもお話できたらと思っております。ちなみに私はキリスト教ではありません。結婚指輪をしていますけれども、那覇バプテスト教会で結婚式を挙げたためです。教会で式を挙げてなぜキリスト教ではないのかと申しますと、皆さんお笑いになるかも知れません。私は本島南部のれっきとした大きな親族集団(門中)の宗家の総領であります。私がキリスト教になりますと、「迷える子羊」を沢山作るのではないかと思ったのです。しかし、私は青年時代からキリスト教に関心を寄せていました。

実はこのチャペルに私は初めてお伺いしたのです。その入口のほうに沖縄キリスト教短期大学の初代学長仲里朝章先生のお名前が記されていました。私の大学時代に進路やら失恋やら色んな悩みを抱えていました。夜も寝られずに仲里先生の牧師館をお訪ねしました。その頃キリスト教短大はありませんでした。その際、「照屋君、一緒に神に祈ろうよ」と先生はおっしゃり、祈りの後で先生から聖書を頂きました。その大事な聖書は残念ながら台風の被害で行方が分からなくなってしまいました。あの青春時代の悩みに対する慰めや癒しには、沖縄には昔からカミヤホトケへの祈りがあり

ますが、大体が現世利益的なもので、良いことが授かりますようにと自己中心的に祈り、本当に精神的に癒されることはありませんでした。仲里先生の教会で私は、「ああ、これは素晴らしい」と思ったのです。

その後、教会には行っていませんでしたが、今から50年前にたまたまアメリカ留学した時のことです。当時のアメリカでは、日曜日(安息日)は異教徒にとって身動きのとれない日でした。とくに午前中は、皆教会に行くからです。私はキリスト教ではなかったので、午前中はドラッグ・ストア、今のコンビニエンス・ストア位しか開いていないので退屈しておりました。そんな折り、後に沖縄大学の学長になった狩俣真彦さんから教会への誘いをうけました。彼は一年先にアメリカへ留学していましたが、沖縄にいた頃からのキリスト教でした。狩俣さんが、「照屋君、退屈ならうちの教会に行かないか？」と声を掛けられて彼の教会へ行きました。それからバプテスト教会と縁ができました。

それから、一緒に留学した鹿児島県出身の日吉さんがいましたが、彼は立教大学卒です。同大学はセント・ポール・ユニバーシティと称し聖公会関係の大学でしたので、東京での大学時代に洗礼を受け洗礼名がジミーでした。教会では信者が外国へ行く時に、所属の教会の牧師から同教会の信者であるという証明書をもって、旅行中や滞在先の同じ教派の教会へ持っていきますと、直ちに昔からの友人のようにその教会で受け入れてもらえます。そこで日吉さんと監督教会へ行きました。バプテスト教会も監督教会のどちらも素晴らしかったです。滞米中いろいろな教会を回ってきたのですが、日本の教会と違うところも多々あることがわかりました。

私の結婚の際に式をどこでやるか考えました。弟たちは大抵波の上の神社でやっています。しかし神社や寺院は金儲けばかりやっているように見え、あまり社会への還元が少ないように思い、バプテストの照屋寛範先生のもとで式を挙げました。信仰に関して厳しい雰囲気のある照屋先生は沖縄の土俗や民間信仰について本を書かれ、私の歴史研究で教えられたことが多かったです。以上のように私がベッテルハイムの琉球伝道を研究する前から、キリスト教とのご縁がいろいろありました。

ベッテルハイム研究の動機

その私がベッテルハイムを研究するようになったのは、ご覧になっているレジュメの最後のページにあるベッテルハイム評に起因しています。ベッテルハイムの研究は昔から多くの方がしております。レジュメの四枚目の「種々のベッテルハイム評」の4.の評はG. H.カー氏のもので、彼は歴史家で沖縄の歴史を英語で出版した人です。その本は日本語訳でもました。この訳本の中のベッテルハイム評が、沖縄のクリスチャンを大いに憤慨させたことがあります。カー氏はベッテルハイムについて、次のように述べています。

ベッテルハイムを琉球に派遣した琉球伝道会が彼をえらんだのは、まことに不運なことであった。彼の琉球政府および琉球人に対する態度は、粗野で、無礼で、横柄で、そのうえ目的のためには手段を選ばず、という確固たる信念をいだいていた。彼は沖縄に、新教、旧教の激しい思想的対立をもちこんだ。…ベッテルハイムは感情的には全く不安定な人間であった。琉球人にたいし、心から、惜しむことなく賞賛を与えたと思うと、急転して次の瞬間には、自らを抑えるすべもなく、威嚇したり、脅迫的行動をとった。…ベッテルハイムは、彼こそは日本をして大英帝国に交渉を開始させる鍵を握る人物である、と自惚れていたのも、イギリス当局は彼の価値を正当に評価していないという不満をいだいていた。…ベッテルハイムは琉球人をただの一人としてキリスト教に改宗させ得なかった。その上、医者としても、英語、数学、人文学の教師としても自らの日記に示すごとく、何ら貢献するところがなかった。それどころか、彼の存在は紛争の原因となり、信用と、客観的判断が必要とされる場所では、必ず不信と誤解の因となり、信用と、客観的判断が必要とされる場所では、必ず不信と誤解をうえつけるようなことをした。(ジョージ・H.カー『琉球の歴史』琉球列島米国民政府刊、1955年、229, 230, 231, 234頁)【下線筆者】

カー氏の本は最初英語で書かれ、翻訳され赤表紙の『琉球の歴史』となり、1956年出版されました。カー本はベッテルハイムのことだけが書かれているのではないのですが、他の箇所の叙述でその歴史観に余り信

用できないところがあるとの評価がありました。琉球列島米国民政府が大量に出版して沖縄の各学校にトラックで配布しました。反米的な感情が起って来た当時の沖縄で、米民政府による官製の沖縄歴史書だとして反発した人もいました。米国民政府が創設した琉球大学で歴史の時間にテキストとして使用してもらいたいとの強い意図があったのですが、歴史科の先生方は嫌だと言って使用しませんでした。沖縄中の学校に無料で配布された大量のカー本は、敬遠されて読まれず職員室の片隅にツン読の状況にあったようです。

さて、沖縄について書かれた英文の本は少なく、今でも少ないのですが、アメリカ人はこの本を通して沖縄とベッテウハイムについてのイメージを形成していたのです。このことは私が1966年に、米国政府の奨学金での米国留学（博士課程進学）のための面接試験で体験しました。試験場にいた数人のアメリカ人の面接官が、「君、学位論文のテーマは何か？」と問い、私が「英宣教師ベッテルハイムです。」と返答すると皆いっせいに爆笑したのです。米人の試験官が笑った理由を当初私は解せなかったのですが、間もなく彼らのベッテルハイム観がカー本にあるベッテルハイムを「気違い坊主」的に記述したことに由来することがわかりました。そのことに反発した私は落選を覚悟してベッテルハイム研究の重要性を強調しました。このことを契機に、私はベッテルハイム研究に専念する決意を固めたのです。

当時私の周辺には多くのクリスチャンがいました。戦前の宗教弾圧政策への反動もあり、また多くのアメリカ人宣教師も住民と親しく接触していました。当然、カー本は沖縄の教会関係者の間でも反発が起りました。明治後半以来の好意的ベッテルハイム像と、これを一刀両断で否定したカー本のベッテルハイム像のどっちに歴史の真実があるのだろうかとの思いが私の研究の原点になります。

ベッテルハイム研究に着手

ベッテルハイムの研究をしたいと思っていた私は、幸いにして琉球大学で良い先生に恵まれました。外間政章先生という英文科の教授で、先生は英文学者でありまた歴史家でした。先生は司会をしておられる山里恵子先生のご尊父で、敬虔なクリスチャンでした。外間先生もカー本の記述に憤慨しておられました。私が

外間先生と親しく接触できたのは、先生のご子息外間寛さんと首里高校で同級生だったことがご縁になりました。寛さんは後に中央大学の総長になった法学者ですが、友人として長く親しくお付き合いしています。外間先生とのこのようなご縁から、いろいろと学問上のご教授をうけました。私がこれまでやってきた歴史研究は、大体外間先生のご業績を継承し発展させたもので、先生から大いなる学恩を授かりました。私のベッテルハイムや日本開国をした米提督ペリーの研究も、その一例です。

ベッテルハイム研究の総仕上げは、アメリカへ行ってやりました。なぜアメリカかと申しますと、実はベッテルハイムの子孫がアメリカに住んでおり、その子孫が所有する宣教関係の史料を利用するためでした。ベッテルハイムは8年間那覇で伝道に従事した後、交代のモートン師が来島したことで帰国の途につきました。帰国の途中にバーミューダ島に船の修理で立ち寄った際、ニュー・ヨークまで家族を連れて行きました。ニュー・ヨークを訪れたベッテルハイム一家は、イギリスに帰らずアメリカに移住しました。その時点でベッテルハイムと琉球伝道会との関係は切れましました。現在ベッテルハイムの子孫は米国人として各地に散らばって住んでいます。その子孫の一人がカンザスにおられたハンプトン夫人で、ベッテルハイムの日記と書簡を所有しておられるとの情報を得て渡米しました。ベッテルハイムの日記と書簡という第一級の史料を使って、カー本のベッテルハイム像の真偽を確かめたいという意欲に燃えていました。

ユダヤ出自のベッテルハイム研究の問題点

ベッテルハイムは、実は純粋のイギリス人ではありません。ハンガリーのユダヤ系の出身です。レジュメの二枚目にベッテルハイム夫妻の肖像がありますが、ベッテルハイムはアングロ・サクソン系の顔ではありません。彼のがっちりした顎と唇を真っ直ぐに結んだ容顔から、那覇での8年間の苦難の日々に耐えてきた強い意志を読み取ることができるのではないのでしょうか。夫人は純粋のイギリス人です。カー本のベッテルハイム評が厳しく否定的な記述になっているのは、私はカー氏が使った史料の量と質に起因があると考えています。他の学問分野でも同様ですが、歴史研究にとってどのような史料を重点的(中心)に使うかに

よって結果が変わってきます。文字史料の場合は、ある意図を持った人間の思考を通して叙述されます。ベッテルハイムについて書いた同時代の西洋人の反ユダヤ主義が、多くの史料から読みとれます。現在欧米でも潜在するアンチ・セミティズム(反ユダヤ主義)は、今から150年前の欧米社会では顕在していました。シェークスピアの作『ベニスの商人』にある反ユダヤ主義は西洋中世に形成され、博愛・平等を唱えるフランス革命を経ても無くならず、ヒトラーのホロコーストまで欧米人の心理の中に強固に存在しました。那覇滞在中にベッテルハイムと直接会った欧米人の中には、反ユダヤ的感情を記録に残した者がいます。たとえば、ペリーの日本遠征隊の通訳ウィリアムズやロシア提督ブチャーチンに同行した著名な作家ゴンチャロフなどが、ベッテルハイムに対する反ユダヤ的感情を込めた記録を残しています。その他にもイギリス東洋艦隊のコ克蘭提督も同様な悪感情を表明した記録があります。カー氏が酷評するベッテルハイム像は、彼が主に使用した史料の選別に由来しているのかも知れません。また、これらの史料を駆使するカー氏ご本人の性格・思想も問われるべきだと思います。すなわち、カー氏に反ユダヤ感情があったのではと思っています。私自身スタンフォード大学でカー氏に直接会ったことがありますが、個人的なことですので詳しくは申しあげられませんが、性格的に変わった人だという印象があります。

19世紀に『資本論』を書いたカール・マルクスや英帝国首相になったデイスレーリーも、ユダヤ出自でしたがキリスト教徒でした。しかし欧米人の中には、ユダヤ人はクリスチャンになっても本質はユダヤ人だという牢固とした感情があります。アメリカでも歴代大統領にユダヤ系はいません。これからのアメリカで選挙民の関心は、カトリックでアイルランド系のケネディ大統領の後で残されたマイノリティの黒人・ユダヤ系や女性から大統領が何時でるのかにもあります。私はベッテルハイムの研究で、欧米人の反ユダヤ主義にも留意すべきだと考えています。

琉球王府の記録の問題点

翻って、ベッテルハイムが伝道の対象にした琉球側の史料に全幅の信頼がおけるかの問題があります。封建社会の琉球において、特に琉球王国の支配者にとっ

てベッテルハイムは邪魔者でしかありませんでした。ベッテルハイムはいない方がいい、欧米人は来ない方がいい、伝道活動をしてもらっては困るという意志で書かれているのが、琉球王府の『評定所文書』やその他の公的記録です。これらの王府の公文書は薩摩の役人も検分するので、薩摩の琉球政策と齟齬するような内容は避けることとなります。薩摩の支配を受けている関係上、本当のことが書けない制約があります。ベッテルハイムと琉球の住民との親しい接触などは、正直に記録に残せないのです。琉球側の記録だけを史料に使うと、ベッテルハイムの悪いイメージが描かれます。しかし宣教師に日頃接した庶民が描くベッテルハイム像は、官側の公式文書と異なり大体が良いイメージで、その上彼を懐かしむ内容の伝承が多いのです。ベッテルハイムの同時代人がまだ生きていた時代に、これらの民間伝承を聞いていた明治・大正生まれの人々は、宣教師を「ナンミン ヌ ガンチョウ（波の上の眼鏡）」の愛称で呼んでいました。従ってこの民間伝承の中で育ったカー氏以前の沖縄の歴史家の伊波普猷・東恩納寛淳・真境名安興といった錚々たる研究者達は、ベッテルハイムについて好意的な評価をしています。ベッテルハイムという一人の人間について、この三人の歴史家とカー氏は正反対の評価をだしたことは、双方がそれぞれに使った史料の問題、さらにそれ以前に各著者のもっている思想の問題に起因していると思います。

以上のようにベッテルハイム研究には史料批判が必要ですが、現存するベッテルハイムの日記や書簡類を詳細に検討していく過程で、カー氏の叙述には拙速な面があることがわかりました。カー氏はベッテルハイムが沖縄で信者を一人としてつくらなかったと述べていますが、事実と反します。ベッテルハイムの日記を丹念に調べると、何人かの熱心な求道者の名前や殉教したと思われる崎浜秀能という青年のこともでてきました。このことから、カー氏はベッテルハイム関係の全史料を熟読せずに、判断したと思います。このことは史料の偏った使用の仕方や研究者の先入観（偏見）によって、歴史叙述において歴史家の間で大きな違いが生じる好例と言えます。

琉球伝道での三つの壁

さて、ベッテルハイムの琉球での8年間の伝道において、彼が直面した大きな壁が三つあります。一つ

は、江戸幕府が出したキリシタン禁令です。豊臣秀吉以来の禁令は江戸幕府初期に一層強化され、琉球国にも遵守を強制しました。フィリピンを支配しているスペイン勢力が、キリスト教の日本布教を隠れ蓑にして日本の植民地化を図っているのではないかという猜疑心からキリシタン弾圧をしたと言われていています。1636年の島原の乱で2万5千人の信者が幕府軍の攻撃に徹底交戦して死んだことが、鎖国への大きな契機になりました。1609年に薩摩の支配下におかれた琉球でも、鎖国令による琉球を訪れる欧米人やキリスト教に対する取り締まりが強化されました。ベッテルハイムの琉球伝道にあたっての第一の壁は、この「悪魔切支丹」禁令でした。

第二の壁は、琉球王府です。首里にあった王府は封建国家であったとの理解が必要です。少数の支配階級（サムレー・士族）によるヒャクショウ（百姓・庶民）の支配は、現今有り余る自由を享受している現代人には想像すらできない過酷なものでした。ペリー提督は、「琉球の庶民はメキシコの奴隷より惨めだ」と、その遠征記に記しています。第二尚氏の時代から、王府はその宗教政策として聞得大君を頂点とするノロ（祝女）組織に人民を組み込んで統治していました。このノロ組織は、ベッテルハイムの来島以前数百年の歴史をもつ牢固たる壁でした。

第三の壁は、ノロ組織と関連性をもつ琉球の土俗信仰です。琉球の土俗信仰はアニミズム的で、これに祖先崇拜が加わったものと言えます。土俗信仰のアニミズム（精霊信仰）は科学的知識の普及によって矯正できるのですが、祖先崇拜はアニミズムの一種とも言えるものですがアニミズムのように簡単に排除（否定）できない信仰です。16世紀にキリスト教が日本に導入されたキリシタン時代の昔から、日本へのキリスト教伝道の最大の壁（難問）が祖先崇拜だったと言えます。第一・第二の壁は明治維新後に撤去されましたが、この第三の壁は明治憲法・昭和憲法の信仰の自由の保障の下で現在も日本人の精神生活の中に残っています。自分個人を最終的なものとする生命の流れを、逆に時間を過去に辿ると祖先との長い生命の流れに確かに繋がることができるという単純な信仰は、特に東アジアで生き続けています。年中行事となっているお盆の三日間の日本人の民族移動がその好例です。キリスト教の各派では、祖先崇拜に多様な対処をして

きたようです。トートーメー（位牌）について、キリスト教への改宗者に焼却を指示する教派や、祖先はカミではなく崇拝の対象にはならないが尊敬の対象のシンボルとして残してもよいとする教派もあります。

原始時代からあったアニミズムの一種の祖先崇拜は、中国起源の儒教によって強化され、東アジアの儒教文化圏で広く信仰されました。ところで、現代の中国・韓国・日本における宗教状況の中で、キリスト教の受容に目立った相違がみられます。韓国のキリスト教信者数は25%以上、台湾は18%、最近の報道では中国のキリスト教信者数は10%とのことですが、日本の信者数は1%前後だというのが通説です。旧東アジアの儒教文化圏内の各国におけるキリスト教徒数の相違は、儒教受容の濃淡に起因していると思います。儒教が生活の隅々まで浸透してきた中国（台湾）や韓国と、儒教を教養として受け入れてた日本との違いではないでしょうか。そして各民族の世界観・宇宙観がその土台になると思います。中国人は人間の頭上に広がる空間を、「天」と記すと同時に宇宙の主宰者である「天帝」が住むところと連想したようです。これは英語のヘヴン（heaven）と似ています。ヘヴンはゲルマン神話にでてくる巨大な屋根に由来し、神・天使・聖者の聖霊が住む天国天界を本来指すようです。儒教を生活の中で骨肉化した中国（台湾）や韓国の「天帝」観は、西洋人が考えた神々の住む「天国」観に著しく近いわけですね。クリスチャンが祈る際に「天にまします我らの父よ」と唱えるのを、中国人や韓国人は余り違和感を持たずに受け入れるのではないのでしょうか。一方、八百万の神々の居る日本では、天地・山川草木の至る所にカミ・聖霊・霊魂・悪霊などが充満している多神教のアニミズムの世界です。日本では人間の頭上に広がる空間を「そら」と称し、漢字の「空」を当てます。「空」とは、「広い、虚し、空虚」で、中国のように「天帝」の住む所のイメージはありません。日本人が考えた「そら」のイメージは、英語のスカイ（sky）に似ているかも知れません。スカイは古ノルド語の「雲」という漠然としたものが原意のようです。

19世紀の英国人

このような土俗信仰や祖先崇拜が住民の魂を長年緊縛している琉球に、ベッテルハイムは150年前に来島しました。19世紀の欧米では、海外でのキリスト教

宣教運動が活発でした。アジア・アフリカ・オセアニア・南北アメリカの各地での布教を目的とした数多くの伝道会が設立されました。数多い伝道会の中で、唯一琉球だけの宣教を目的とするため創設されたのがイギリスの琉球伝道会でした。ベッテルハイムはこのミッションから派遣されたのです。世界地図の上では粟粒のように小さい琉球に、なぜ宣教師を派遣するという計画がイギリスで生れたのでしょうか。それはベッテルハイム来島の約半世紀前から始まった琉球人と英国人との間に展開された心温まる国際交流の源があります。

イギリスは17世紀の市民革命と18世紀の産業革命によって、西洋諸国中で最も近代化が進んだ国でした。政治・外交・軍事・経済・文化の各分野で他の西洋諸国の中で傑出していました。しかしヨーロッパで急速に国力をつけたイギリスですが、俄かに金持ちになった「成り上がり者」という悪評を他の西洋人から浴びせられたのです。「海賊の子孫」は昔からイギリス人を評する言葉ですが、金持ちになってもイギリス人のマナー（礼儀作法）は粗野な海賊のままだったのです。19世紀前半、マナーの悪かった当時のイギリスで、イートン・ハロー校などのパブリック・スクールでのゼントルマンシップ教育の必要性が叫ばれ、特に1828年ラグビー校の校長に就任したトマス・アーノルドが紳士教育の先頭に立ちました。「紳士の国イギリス」の形成は、19世紀後半から本格化します。人間の生活習慣を改めるには長い時間が必要で、イギリスが世界の冠たる「紳士の国」と認められるようになったのは、20世紀初頭の頃でした。従って、琉球人と英国人が本格的に接触を始めた18世紀末から19世紀前半の頃は、英国人のマナーはいまだ粗野なままだったようです。その英国人が那覇に来て出会ったのが、洗練されたマナーを身につけた琉球の官民でした。

英国人と琉球人の良き出会い

1797年、英艦プロビデンス号が北太平洋から日本列島に沿って海域調査中に、宮古の池間島の北にある八重干瀬で座礁沈没した事件がありました。幸いにして船員らは大型ボートに乗り移り宮古本島にたどり着いた時、島民から思いがけない手厚い援助（水・食料）の手を差し伸べられて感動しました。島民は親切であるだけでなく、礼儀正しく接しているのに驚嘆してい

ます。それから約20年後の1816年、中国の清朝との貿易条件の改善のため派遣された英使節の護送の任にあった英艦隊の二隻が、食料の補給と船員の休養のため那覇に寄港して40日余滞在しました。その中にバジル・ホール艦長がいて、那覇滞在中の英国人と琉球の官民との友好的な交流について彼の航海記で詳細に記しています。同行のマクラウド外科医も彼の航海記で同様な内容の記録を残しています。2人の航海記は英米の英語圏で評判になり版を重ねただけでなく、蘭・独・仏・伊語にも翻訳されて欧米人の間に広く琉球人の良いイメージを植えつけたのです。即ち、琉球人は、礼儀正しく、友好的で、誠実で、知的好奇心のある魅力ある人達であるということでした。バジル・ホール一行の来島から24年後の1840年に、さらに琉球の良きイメージを強化・増進させる遭難事件がありました。1840年というと、英国の中国進出の端緒となる悪名高いアヘン戦争勃発の年です。この戦争に参加していた英輸送船インディアン・オーク号が、暴風に遭い航路を見失い沖縄本島中部の北谷海岸の沖で座礁したのです。北谷の村人は強い風雨の中で船上の乗組員を海岸へ誘導するため、朝11時から真夜中の11時まで懸命の努力を惜しみませんでした。英国人たちは、先ずこの村人の救助活動に感激しました。北谷に上陸後は急造の家屋を設け、中国へ無事帰還するまでの40日余の間、北谷村民は食料の供給をはじめ乗組員の休養のための奉仕活動に専念したのです。琉球側では既にアヘン戦争の勃発のことを知っていました。琉球国の宗主国中国が戦争をしている相手国の英国は、いわば琉球の敵でもあります。難破で異国の海岸で窮乏している弱者となった英国人を人道上の理由から援助したのです。乗組員の一人は、このような博愛的な行為は当時の西洋では考えられず、サマリア人的博愛精神(ルカ10:25-37)の発露として絶賛しました。現在北谷町の愛称が「サマリア人の里」であるのは、この英国人の北谷人を賞賛した故事に由来しています。

英国海軍琉球伝道会の設立

1797年の宮古での英艦プロビデンス号の遭難事件・1816年のバジル・ホール一行の琉球での住民との友好的交流・1840年の北谷沖での英船インディアン・オークの遭難事件の他に、ベッテルハイムの来島までの半世紀の間に、他の英国艦船が琉球を訪れて住民と

の間に友好的関係を築きました。1816年のバジル・ホールの琉球訪問の際に同行していた一人の士官がいました。ジョン・ハーバート・クリフォードといい、海軍を退役後にアイルランドのカトリック教徒を英国教会派に改宗させる運動をしていましたが、彼の脳裏から一度訪れた琉球での親切な島人のことが離れませんでした。特に1940年のインディアン・オーク号事件のことを知ったことから、クリフォードは琉球へのキリスト教の布教計画に乗り出しました。薩摩のその対琉球政策で、琉球に渡来した異国人(欧米人)が求める食糧への代償としての金銭のやり取りが厳禁されていました。薩摩は金銭のやり取りが、やがて幕府が禁じている貿易に発展すると懸念したため、琉球王府は来島した異国船が求める食糧を無料で提供していました。欲しい物品を無料で受け取ることに心を痛めたクリフォードは、これまで英国人が琉球人から受けた恩恵にたいする返礼を「精神的な贈り物」としてのキリスト教の琉球伝道で恩返しする決心をして、1843年琉球伝道会を設立したのです。しかも、インディアン・オーク号の乗組員の一人は、琉球人は文明人(英国人)に劣らぬくらい素晴らしい素質を有しているが、残念なことに女子を大事にしない男尊女卑・男逸女勞の社会であり、キリスト教のみがこの女性の社会的地位を高めることができると、記しているのに注目しています。素晴らしい琉球人にキリスト教を是非伝えたい、特に琉球の女性のためにもという願望が、クリフォードの琉球伝道会設立には込められていました。

ベッテルハイムの琉球への派遣

クリフォードが創設した琉球伝道会は、英国教会派のプロテスタントでした。当時の欧米のプロテスタント系の海外伝道では医療伝道が盛んでした。琉球伝道会でも琉球へ宣教師一人と医者一人の二人を派遣する計画でした。しかしプロテスタントですから、普通宣教師と医者は家族を同伴するはずですので資金的に問題を抱えていました。当時琉球伝道会の基金は、家族同伴の一人分しかありません。伝道会の苦境を打開したのが、ベッテルハイムの応募でした。医者である彼は海外伝道に意欲を燃やしていたのです。伝道会はベッテルハイムの経歴を見て満足しました。

ベッテルハイムは1811年、ハンガリーのレスブルグのユダヤ系商人の子として誕生しました。幼少の頃

から聡明な彼は、語学力に優れ生涯で13カ国語を話せたようです。医者になるため13歳の時親元を離れ、フランス語教師として自活し、25歳の時イタリアのパデュア大学で医学博士号を取得しました。中近東諸国で軍医として数年間勤務した頃、ユダヤ教からキリスト教へ改宗しました。その際の導きの手となったのが英国教会の牧師で、その牧師の勧めで英国へ渡りませ。ロンドンで医療に従事して海外伝道を志していた頃、英国娘と結婚し英国籍を取得して帰化しました。

伝道会ではベッテルハイムについてまだ牧師の資格を取得していないことに懸念を覚えましたが、琉球での伝道活動の一年後に香港駐在の英国教会のビクトリア主教から正式の牧師転出許可状を受ける約束を英国教会から取り付けました。琉球への渡航の準備が整いベッテルハイム家は、1845年英国を後にしました。家族ははじめ3名(夫婦と長女)でしたが航海中に男子が誕生し、さらに那覇滞在中に次女が誕生して5名になります。沖縄生まれの次女は生誕地に因んでナンシー・ルーチャー(琉球)・ベッテルハイムと命名されました。

東アジア情勢の変化の中での伝道

ベッテルハイム一家が那覇に着いたのが、1846年4月末日でした。1816年バジル・ホールが琉球を訪れた頃の琉球を取り巻く平穏な東アジア情勢は、1840年に勃発したアヘン戦争によって激変していました。この戦争で連戦連勝した英国人のアジア観が、アジアの文化とアジア人に対する尊敬の念から蔑視へと大きく変化しました。半文明のアジアに対する世界最高の文明を自負する欧米という図式です。欧米人は優れていて強力であるがアジア人は劣等で非力であるという傲慢な考え方が、白人至上主義となり20世紀前半までの欧米社会の潮流となります。このことが逆にアジア人に欧米人に対する不信感を助長することになります。ベッテルハイムの那覇滞在中の琉球人と彼との間の摩擦も、このアヘン戦争後の国際情勢の激変を理解する必要があります。バジル・ホール時代の東アジアにおける牧歌的な国際交流の時代は過去のものとなりました。欧米列強の非欧米地域での弱肉強食の植民地争奪競争が始まったのです。

ベッテルハイムも時代の子でした。今や彼は帰化してれっきとした英国人です。その英国は、アジアの盟

主中国を屈伏させた最高の文明国です。その誇りある文明国の一員となったベッテルハイムには、琉球で実現させたい文明人としての大きな抱負がありました。第一にキリスト教の宣教、次に彼の優れた語学力を生かした聖書の翻訳、さらに西洋医学による住民への施療、そして西洋文化の成果である科学知識を伝授する住民のための学校の設立の4つでした。

伝道の黄金時代の終焉

1846年5月、ベッテルハイム一家は那覇の波の上にある護国寺に居を構えて伝道活動を始めました。首里の王府は一家の入国に強く反対したのですが、ベッテルハイムが強引に上陸を敢行したので王府も滞在を仕方なく黙認する形になりました。しかし鎖国令で異国人の居住は許されないで、王府は護国寺境内の前後に番所(監視所)を設け筑佐事という下級役人の警備員を常駐させ、24時間体制でベッテルハイム一家の行動を監視しました。ベッテルハイムが外出の時は、筑佐事が常に尾行し宣教師の外出中の行動を詳細に王府に報告しました。軟禁に近い状況ですが、外出は阻止されなかったため、役人の尾行のままベッテルハイムはほぼ自由に那覇・泊・首里へ出掛け、人の集まる市場で習い立ての琉球語で伝道を始めました。那覇・泊・首里の各市場では、数10人から時には100人を越す聴衆を前にして、大声で神の道を説きました。また住民への施療もほぼ自由にやれました。しかし同じ患者への再度の施療は、前もって役人がその患者を余所に移してしまい治療ができない処置をとりました。王府から西洋式の学校の設立は拒否されたのですが、聖書の琉球語訳の作業にも着手しました。後年、ベッテルハイムは那覇滞在の1年半の時期を懐かしんで「宣教の黄金時代」と回顧しています。

宣教の黄金時代が終わったのは、来島1年半過ぎた1846年10月の故尚育王の国葬の時からです。ベッテルハイムと同時期に日本語の習得のため来島した2人のカトリック神父と共に、ベッテルハイム夫妻は国葬に参列のため首里に向かいました。首里の観音堂付近の坂道にさしかかった4名の英仏人は、突然群衆に取り囲まれ首里行きを阻止されました。投石をもって追われたキリスト教宣教師らは怪我もして、国葬への参列を断念して帰宅しました。この事件以後、王府の英・仏の宣教師への監視体制が強化され、「宣教の

黄金時代」は幕を閉じました。筑佐事はこれまでの尾行の代わりに、ベッテルハイムの外出の際には選考して路上の住民を宣教師と接触しないように追い払いました。筑佐事は道路に面した家屋の扉が開いていると閉じさせ、宣教師の家庭訪問を阻止しました。さらに、町内会単位で宣教師を監視する体制も組織して、ベッテルハイムが身動きできないように締めつけたのです。街頭での伝道が不可能ならばと、ベッテルハイムは宗教冊子（パンフレット）を住民の家に投入する方法も、筑佐事が投入された冊子を直ちに回収してしまいました。これでは幾ら豪気なベッテルハイムでも、手も足も出すことができません。けれども彼はこんな苦境の中にあっても、伝道を放棄しませんでした。英国を出発する際、ベッテルハイムは伝道会のクリフォードから一通の「訓令書」を渡されています。異教徒の琉球での宣教にあたっての困難性を予測したクリフォードは、その訓令書の中で次の聖句を引用しています。「蛇のように賢く、鳩のように素直であれ。」（マタイ10：10）、です。政治・社会・文化・風俗習慣の全く違う異境の地での宣教には、知恵をはたらかせることが大事だとの趣旨でしょう。マタイ伝福音書を翻訳したベッテルハイムは、同書同章中の次の聖句も十分承知だったでしょう。「私が貴方がたを遣わすのは、羊を狼の中に送るようなものである。」（マタイ10：16）や、「また貴方がたは、私の名の故に全ての人に憎まれるであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」（マタイ10：22）も承知していたはずです。さらに、ベッテルハイムが困難の中でも琉球で8年間も頑張り通せたのには、同マタイ伝の次の聖句を、胸に強く秘めてのではないかと思います。「カイザルのものはカイザルへ、神のものは神に返しなさい。」（マタイ22：21）が意味する政教分離です。琉球の地の主権者は琉球王かも知れないが、この世の主権は神にあるので、彼は琉球国王自らキリスト教の教えに従うべきと、しばしば王府に進言しています。彼にとって、異教徒の地での宣教に現地人との多少の衝突は避けられないことを覚悟していたようです。ベッテルハイムを研究していると、彼は以上のことを全て招致し殉教も覚悟の上で伝道活動をしたと思います。現代の我々は憲法で信仰の自由を保障されていますが、その現代人の中でベッテルハイムの伝道での激しい王府の官憲との闘争について、「もっと穏やかな方法で伝道

できなかったのだろうか？」と疑念を差し挟む人もいます。しかし150年前の琉球の専制的な封建社会と現代の自由で民主的な社会とでは、宣教の方法手段について同列に比較し議論しては歴史の真実を把握できないでしょう。

新しい神の受容と拒絶

官憲による宣教活動にたいする種々の妨害があっても、ベッテルハイムは臆するどころなく住民との接触を絶えず機会を捉えて試みました。彼の日記などを詳細に読んでいくと、住民の中でひそかにベッテルハイムに接近して来る人も少なからずいました。彼が市場などの群衆にたいして説いた「神の前では、国王も庶民も皆平等である」とか、「イエスは世界の人がこぞって崇めるべきだ」と言う、住民にとって全く新しい神の概念に衝撃を受けその確認のためベッテルハイムに近づいたのでしょう。護国寺など寺院の門にある一對の仁王像を指して、彼は民衆に対して「あの仁王像を叩いても罰があたらない。ただの木片に過ぎない。私が説く真の神を拝みなさい。」と、民衆にとって驚くべき刺激を与えました。かつてベッテルハイムはユダヤ教徒でした。ユダヤ教やイスラム教では、特に偶像崇拜を厳禁しています。それで、ベッテルハイムには他のキリスト教の教派の宣教師よりも、偶像崇拜を強く糾弾する神学上の確信があったのではないのでしょうか。琉球の若者に頭がいいのがいて、ベッテルハイムを困らせる質問をするものもいました。「神がこの世を造ったとお話ですが、ではその神は誰が造ったのですか？」と、ベッテルハイムに問い掛けた侍もいました。太古以来のアニミズムや祖先崇拜を守り通さねばならないと固く信じている住民の中には、キリスト教に改宗するのに躊躇するものもいました。これに対してベッテルハイムは、彼自身がユダヤ教からの改宗者であり、このことでハンガリーの家族と絶縁状態にあるという苦悩の改宗体験を話して説得したのです。マタイ伝には、「地上に平和をもたらすために、私が来たと思うな。平和ではなく、剣を投げ込むために来たのである。私が見たのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をその姑と仲違いさせるためである。そして家の者が、その人の敵となるであろう。」（マタイ10：34-36）、という激しい口調の聖句があります。ベッテルハイムの改宗の際には、文字通りこの聖句のままに

父と絶縁したのでした。

ベッテルハイムが8年間も那覇におれたのには理由があります。18世紀末から半世紀間に、60隻以上の欧米(英・仏・米・露・プロシアなど)の艦船が毎年のように琉球に寄港しました。王府がベッテルハイム一家を無理に島外追放すると、欧米勢力に報復されるのではないかと恐れて一家の退去を強行できません。当時の特異な国際情勢がベッテルハイムの那覇での長期滞在を可能にしたのです。8年間の伝道生活の中で、新しい神の伝道に抵抗する頑固な役人や住民から暴力を数度も振るわれたこともありました。大部分の住民は王府の禁制に従順だったし、また祖先伝来の信仰を固守してベッテルハイムを避けていました。しかし、少数ではありますが、彼の説教に耳を傾け熱心な求道者になった者が40人程いたようです。信者の具体的な名前として、筵屋と草履屋の職人・通訳の新垣・使用人の崎浜秀能・宮里・富村・名嘉などが史料から読み取れます。また数名の者(大工某その友人の夫婦・長嶺兄弟)に、洗礼を授けたと書いてあります。8年間の伝道活動の結果として信者数が余りにも少ないと感じる方もおられるかもしれませんが、当時のキリスト教禁制の制限下では上出来だと思います。ベッテルハイム自身も最初の頃の日記の中で、この調子では50年かかっても信者は生れないだろうと記しています。しかし、新しい神を受容した琉球人は彼の予想以上に多かったのです。彼より20年前から中国で宣教していた英国人のモリソン師は、伝道生活10年間で唯一人の信者しか獲得できなかったようです。

ベッテルハイムの琉球伝道の史的意義

第一に日本キリスト教史の上で、プロテスタントによる最初の布教としての歴史的意義があります。次に、聖書和訳であります。プロテスタント系の聖書翻訳史上三番目に古い翻訳であります。日本国外で聖書を翻訳したドイツ系のK. ギュツラフと米人S. W. ウィリアムズに次ぐ、三番目に古い翻訳です。ベッテルハイムは聖書を琉球語に翻訳すれば、本土でも使用できると安易に考えていました。しかしベッテルハイムは、1851年頃から琉球語訳がほとんどで役に立たないことを、那覇に来た薩摩人との会話で知り、そこで新たに本土でも使えるようにと漢文訳の聖書に訓点を付した新しい翻訳作業を始めました。しかしベッテルハイムの琉

球滞在中に開国された本土では、多くの欧米の宣教師らによって横浜で和訳をやったのでベッテルハイム訳は余り本土で読まれません。しかし、聖書和訳に従事した宣教師の中には、那覇でベッテルハイムに会い大いに啓発されて日本への伝道と聖書和訳の重要性を悟った者がいました。ペリー艦隊のJ. ゴープルという水兵で、彼は帰国後バプテスト派の宣教師となり日本へ来て伝道と聖書和訳をしました。

ベッテルハイムの聖書和訳作業の熱が、ゴープルに大きな影響を与えた訳です。ベッテルハイムの聖書和訳について、沖縄キリスト教短期大学と関係あることをお話します。キリ短大の教授もされた日本聖書教会総主事の新見宏氏が、1976年ロンドンの英国聖書教会図書館でベッテルハイムの未刊の漢和对訳の『馬太伝福音書』と『馬可伝福音書』の稿本を発見されました。この2冊は、1858年香港で出版された『路加伝福音書』と同じ漢和对訳です。マタイ伝とマルコ伝をベッテルハイムが翻訳したことは記録に残っていたのですが出版されずに英国の図書館で眠っていたのを、新見宏総主事が発見されたのです。この2冊が1979年、キリスト教関係の出版物をだしている東京の新教出版社から覆刻されました。その際、国際基督教大学の海老沢有道教授と新見宏総主事と私の3名で覆刻版に別冊の『解説』を添えました。こうして私はベッテルハイムの翻訳事業に関して、新見宏総主事を通して沖縄キリスト教短期大学とご縁があったと思っています。

第三番目の史的意義は、ベッテルハイムの西洋医学による琉球人への無料の医療奉仕です。彼の那覇滞在中に住民から一番感謝されたのが医療奉仕でした。医者でもあった彼は外出の際には、医療器具と薬品を入れた救急箱を常に携帯して病院への施療を惜しみなく続けました。外国船が那覇港に入港する際には、必ず医療器具や薬品などを分けてもらっていました。住民への施療と共に重要なのが、牛痘法という新しい西洋医学の導入でした。日本医学史では、天然痘にたいする牛痘法の導入は、1849年長崎駐在のオランダ商館勤務のモーニッケ医師だとされています。ところがベッテルハイムはその前年の1848年に、泊村の医師仲地紀仁と接触して牛痘法を琉球に紹介しました。いわば日本における牛痘法の導入は、長崎での導入より沖縄のほうが1年早かったわけです。ところで聖書翻訳

と関連しますが、ベッテルハイムの翻訳は3種あります。1855年版の『路加伝福音書』（ルカ伝）・『約翰伝福音書』（ヨハネ伝）・『聖差言行伝』（使徒行伝）・『保羅寄羅馬人書』（ロマ書）は、片仮名で書かれ琉球語訳で、1858年版の『路加伝福音書』は漢和対訳となり、1873年版の『路加伝福音書』と『約翰伝福音書』に翌年版の『使徒行伝』は平仮名で書かれ日本語訳です。この三種の翻訳の中で、ルカ伝だけは常に出版されています。ルカ伝のルカは「愛する医者」（コロサイ書4：14）だったと伝えられ、ベッテルハイムは同業者としてのルカに親近感を抱いていたのでしょう。

ベッテルハイムは那覇で家族と共に8年間、伝道・聖書翻訳・住民への医療奉仕と懸命に働きました。1854年彼は沖縄を去りますが、後任のモートン夫妻が着任したこともありましたが、別に沖縄を離れる公私の事情がありました。第一に聖書和訳の出版です。沖縄で出版するには出版社と出版費の問題があり、英国教会のビクトリア主教のいる香港へ行かなければなりませんでした。前述の2種の和訳本は香港で出版されました。次に彼の子どもの教育問題がありました。長女はすでに10歳で、長男も9歳になり正式の学校教育が必要でした。最後に家族の健康問題で、ベッテルハイム夫人が体が余り丈夫でなく心配だったし、宣教師自身は翻訳作業で視力が落ち新しい眼鏡が必要だったのに那覇で入手するのが困難でした。このような事情でベッテルハイムは後任のモートンに琉球伝道を任せました。しかしこのモートンは、翌年の1855年10月、1年半余で琉球伝道を諦めオーストラリアへ去りました。ベッテルハイムが那覇に八年余滞在したのに、モートンは一年余で伝道の任を辞したのです。当時の王府のキリスト教に対する妨害の厳しさと、ベッテルハイムの伝道への不拔の信念と強靱な忍耐力が理解できるでしょう。

以上のように、今回の私の話は私個人の話でつい横道にそれてしまうところもありましたが、「ベッテルハイムの琉球伝道の史的意義」について終わらせていただきます。ご静聴有り難うございました。

（司会）

照屋先生、どうもありがとうございました。先生の

お話、史実に基づいてとても豊かなお話でしたけれども、宣教師が神様の僕としてその業を果たすためにはどうすべきか、というところも踏まえられて、大変なロマンを感じることが出来ました。ありがとうございます。皆様もいろいろお感じになったところがあると思います。ご質問なりご感想なり、何かありましたらお願いいたします。始まるのが10分遅くなりましたので、今35分です。後10分ほどよろしいかと思えます。どうぞ自由に質問なり感想なり述べられてください。

どうぞ、どなたでもよろしいですが。

大城先生お願いします。

（質問）

ごめんなさい。質問ではないですけども、ベッテルハイムの翻訳聖書ですね、覆刻版、80年代に覆刻版が出ましたよね。それはうちの図書館に入っているはずですが。こっちに移ってから見たことないのですが、覆復刻版全部揃っていると思いますので、皆さん、よろしかったら図書館にいらしてください。

（回答）

私は、ベッテルハイムの聖書和訳のウィーン版を、天理大学の所蔵本の覆刻版販売の通知があった時に入手しました。また皆さんに回覧中のマタイ伝・マルコ伝は漢和対訳です。日本語と中国語は文法が異なりますので、返り点を付した訓読法によって対訳したのです。新教出版社から出たのですが高価なので、余り宣伝はしてなかったと思います。天理大学図書館は、幕末に中国から伝えられた聖書と訳本を含めた貴重な中国の書物などを所蔵しています。有名な神学校、たとえば青山学院大学なども多くの類書の所蔵があります。

（質問）

本大学の仲間です。2点ほどご質問があります。一つはG. H. カー博士のベッテルハイムを評価していますが、その評価の背景はどういう形だったのか。どのような根拠でそういう評価をしたのですか。その後、先生が研究された結果、違った評価が出ています。それは今、アメリカではそれに対してどのように評価を下しているのか、比較評価です。

(回答)

はい、分かりました。G. H. カーの史料操作の際の量と質の問題で、彼の歴史研究で人物評価で公平で厳正な史料操作をしたのかどうかの問題だと思います。カー氏のユダヤ系への先入観が彼の叙述の背景にはあると思います。

また、ベッテルハイムの評価に関するアメリカでのカー氏と私の評価の比較論は寡聞にして読んでいたことがありません。

(質問)

後一点です。ベッテルハイムは琉球語の研究をしたそうですが、その後の編集とか、現在それは残っているのでしょうか。

(回答)

ベッテルハイムの文法、辞典などについては、沖縄国際大学の語学系の先生方が10年前にやっておられて、その成果を紀要などで発表しておられます。その研究の蓄積は大きいです。私は語学の専門家ではないので、沖国大の研究成果を有り難く参考にさせてもらっています。

それから、仲間さんの最初のご質問に戻ります。ケア氏（カー氏ご自身では"Kerr"をカーと発音するよりも、ケアの方を好まれたそうです）の本の中のベッテルハイム評は大変短いものです。ベッテルハイムは膨大な量になる8年間の日記を残しました。アメリカの子孫が保管していた日記は19世紀後半の自宅の火事で大半が焼失しました。その後彼の子孫が焼失を免れた日記を分散して保管していました。ケア氏の本が出版された後から、時々複数の子孫の方から日記が公開されたりしていて、従ってケア氏は彼の本の執筆後に出てきた日記を読んでいません。ケア氏の著書は、琉球史の通史ですからベッテルハイムを中心に書かれてなく、その関係で内容と史料に限界があります。ケア氏のベッテルハイム評が、余りにも酷評なので誤解も生じますので、彼の本についての弁明も必要です。今のところ、英語で叙述された琉球史の通史ではケア本が最もよく読まれています。彼は琉球史の叙述にあたって、広く史料を渉猟し在京の沖縄史研究者の意見にも耳を傾けた好著です。ケア氏の英語の琉球史以外に海外の研究者が利用できる本がないため、琉球史を

研究する者はケア本を出発点にしています。沖縄の琉球史研究者もケア本を高く評価していますので、この本の全てを低く評価するのは短慮だといえます。ただ、ケア本のベッテルハイムに関する部分に問題があるのです。

現在、県立芸大のジェンキンス教授が中心になって、ケア氏が読んでない新発見のベッテルハイムの手稿の日記や公文書類の翻刻作業が進行中です。今後、ベッテルハイムに関する新しい事実が発見される可能性があります。しかしながら、私が学位論文を執筆した段階でもベッテルハイムの日記から、ケア氏の記述に反する事実が出てきたのです。前にお話したように、ベッテルハイムは那覇で数名の受洗者と40～50名の求道者という数の信者を獲得したと書いています。神に仕える宣教師が、事実を反することを書くはずはないでしょう。

ベッテルハイムの日記などを丹念に読んでいくと、ケア氏の記述に反するような宣教師と住民との間の心温まる交友関係も浮かび上がってきます。彼が外出すると、官憲の監視の目が届かないところでは住民が親しげに近づいて来ました。特に、彼が医者だと知っている住民は、西洋の薬を欲しがりました。当時、日頃住民の間で見かけられた病気は皮膚病でした。住民が昔から使っていた民間療法での薬草や漢方薬よりも、ベッテルハイムが持参した軟膏の方が数段効き目が優れていたのです。面子にこだわらない庶民は遠慮せずに宣教師に近づきますが、サムレー（侍・士族）は士族の対面もあって婉曲な方法で薬を求めます。ある時、4～5人のサムレーが揃って護国寺を訪問しました。西洋音楽を鑑賞したいと申し出たのです。珍しいこともあるものだと思いながら、ベッテルハイム夫人にピアノで西洋の歌曲を演奏させました。数曲の演奏後、宣教師がこの珍来の客の様子をうかがうと、なんと皆さん居眠りしていたのです。これには宣教師夫妻も呆れてしまったのですが、サムレー達の護国寺訪問の目的は彼らが寺を辞去する際に判明しました。彼らも庶民同様に皮膚病治療のために西洋伝来の軟膏を所望したからです。なんと微笑ましい情景でしょう。長いこと琉球の音階と旋律になれ親しんだサムレーに、初めて耳にする奇妙な西洋音楽を鑑賞できるはずはありません。

当時住民の間では、皮膚病・眼病・癩病・精神病の

患者が多く、ベッテルハイムは王府の悪政が住民の無知と貧困を生じさせたためだと王府を強く批判しています。当時ハンセン病患者は天罰として住民は忌避していたのですが、ベッテルハイムはこのように疎外されている患者を親しく見舞い施療しました。しかし彼が翌日見舞いに訪れるとその患者は既に余所に官憲の指令で移され二度と彼は患者に会うことができませんでした。その他の重病の患者も、一度彼が施療すると彼の目の届かない所へ移されてしまいました。しかし彼は根気よく住民との接触を試みました。ベッテルハイム夫人の自家製ビスケット類を持参して住民の子供らにあげて喜ばれたりしました。軟禁状態に近いといえ、番人の目をかいくぐって寺の裏から外出したりしました。その方法で外出したベッテルハイムは、泊村の仲地紀仁という医者と密かに接触して双方の医学知識と技術の学術交流もやりました。前述の牛痘法の仲地医師への伝授も夜陰に紛れてやったようです。また、長雨で護国寺付近の井戸が汚濁した際には、井戸水浄化のために自腹で大量の石灰を購入して配布し公衆衛

生の向上に努めました。

以上のように、ベッテルハイムの日記や書簡類からは、琉球滞在中の住民との接触の具体的な諸相を知ることができます。ベッテルハイムはこの琉球の地で、あらゆる迫害、中傷、偏見、誤解も受けました。しかし彼は、「全世界に出て行って、全ての造られたものに福音を宣べ伝えよ。〈マルコ16：15-16〉」という海外伝道の使命を自ら選びとり、殉教も覚悟の上で渾身の力をふり絞って実践した信念の人でした。

有り難うございました。

(司会)

はい。随分時間が経ちました。では、講座そのものはこれにて終わりにしたいと思います。先生、どうもありがとうございました。先生に感謝として拍手を送りたいと思います。

(終了)